

## 波佐一本松城を観て歩く

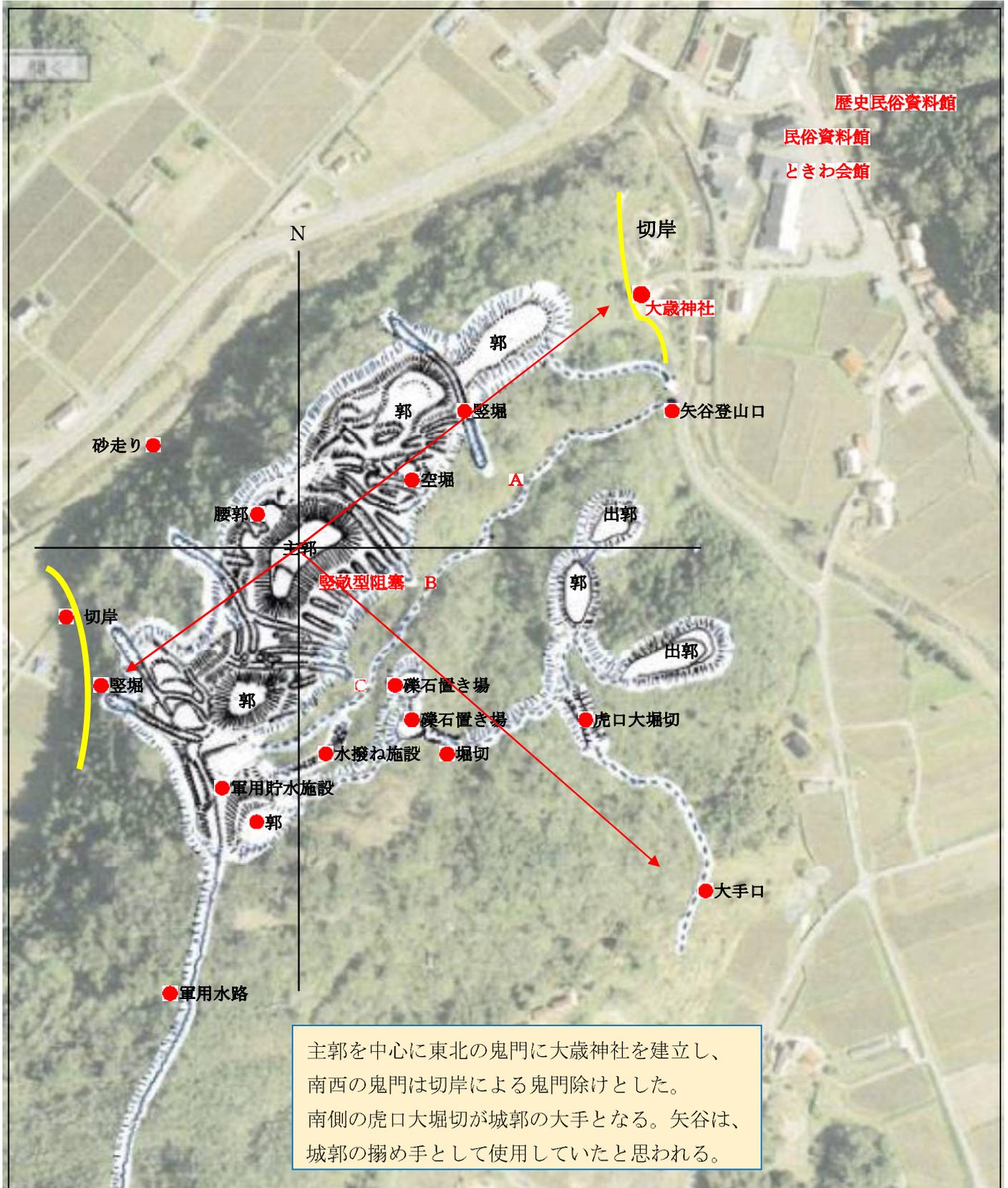
日時 令和3年11月21日(日) 午前9時～正午

集合場所 浜田市金城町波佐 ときわ会館 パワーポイントによる事前学習の後に現地学習

コース 矢谷登山口→矢谷水撥ね施設→軍用貯水施設(水堀跡)→武者だまり→礫石置き場→堀切→虎口大堀切→東側出郭→塹堀→郭→塹敵型阻塞→主郭→腰郭→空堀→土橋→武者走り→塹堀→郭(北側)→登山口

主催 波佐文化協会

浜田市指定文化財：史跡「波佐一本松城」



## 【城郭用語の解説】

波佐一本松城は、連郭式城郭で防御を主目的とした守りの山城です。戦の際には、3,000人の兵士が駐屯しないと守れない規模の城郭です。以下、この城郭に関連する城郭用語を解説します。

「犬走り」いぬばしり：郭の側面や郭の斜面に水平に走る細長い削平部分で帯郭をさらに細くしたもの。

「畝堀」うねぼり：空堀の底に畝状の凹凸をつけ、堀底を歩くのを困難にした堀。

「馬出し」うまだし：虎口を防御し出撃するために、虎口の外に付けられた扇状または方形の小さな郭。

「大手」おおて：城の正面、おもてをさす言葉で、追手とも書く。

「大手口」おおてぐち：城の正面の出入り口、追手口。

「帯曲輪」おびくるわ：腰曲輪の一種で、帯状に細長い郭を囲むような曲輪。巾の狭いものを犬走りという。

「切岸」きりぎし：人工的に敵が登り難い様に山の斜面を削り斜面や絶壁とした箇所。波佐一本松城では、南西の鬼門除けとして作られた。

「軍用水路」ぐんようすいろ：波佐一本松城は、水の手施設を構えた城郭で、2Km 南方の大井谷（大樋口）から水路を引き、城内の水堀に注いでいた。

「腰郭」こしぐるわ：主郭に隣接して置かれた半円状に付けた小さな郭、腰の部分に付くような形であるために腰郭という。波佐一本松城では、主郭の西ビラに2箇所の腰郭がある。

「虎口」こぐち：曲輪の出入口、敵の侵入を防ぐための重要拠点でもあった。この城郭では、大堀切としている。

「主郭」しゅかく：城の主要な郭、本丸に該当する。

「障子堀」しょうじぼり：空堀の底に障子という土塁状の突起をつけ、堀底の歩行を困難にした堀。

「城割り」しろわり：城を破却すること、すなわち攻め滅ぼした敵方の城や反乱の拠点となった城などを破却し、再び拠点とならないようにするなどの目的でなされた（「破城」と同じ）。

「城道」しろみち：城のなかの道、大手道など。

「砂走り」すなばしり：城郭の西ビラに流れる波佐川で、川原の地名。往古、処刑場が行われた所という伝承がある。

「井楼」せいろう：櫓のこと。

「堅畝型阻塞」たてうねがたそさい：主郭、副主郭など重要施設に併設される堅堀。波佐一本城の場合は、堅畝の上・下部とも一方向のみの移動しかできなく、主郭の横矢掛からの攻撃が有効に働く。

「堅堀」たてぼり：台地斜面や山の斜面に等高線と直角に掘られた空堀、斜面を敵部隊が移動するのを妨害するためのもの二重になっているものや畝状のものもある。斜面上の敵の横の動きを封じた。

「段切」だんぎり：緩やかな斜面に切岸をほどこすなどして階段状に段を設けたもの中世の城にはなく、近世から出現した。

「礮石」つぶていし：弓矢の戦の時代に、片手で握られる大きさの石を武器として急斜面を登る敵に投げつけて攻撃する石。波佐一本松城の場合は、礮石置き場が2箇所設置されている。

「出丸」でまる：城郭の防御能力の強化・弱点の補強・物見などの目的で作られる独立した曲輪、出郭ともいう。

「土橋」どぼし：空堀を渡れるように、掘り残すことで作られた土の橋。堀に落ちた敵の移動を封じた。

「土塁」どるい：防備のために、土を盛り土居としたもので、元々は堀を掘った際の土を築き固め、堀との落差をつけて防備を固めることを目的につくられた。

「内郭」ないかく：城の中心部分であり、大規模な城では内堀などで区切られることが多い（⇔外郭）。

「縄張り」なわぼり：城を築く際のグランドプラン、郭配置など城域の設定を意味しており、城の範囲と構成を示す。

「根古谷」ねごや：城の周囲にある家臣たちの住居があつまった集落、根小屋、根古屋とも書く。

「狭間」はざま：矢玉を射出す小窓を「ざま」といい、弓矢で射る場合を矢ざま、鉄砲で撃つ場合は鉄砲ざまという。

「はね橋」はねばし：架け外し可能な橋、引き橋もその一種で、橋台を突き出し、短い橋を板などで作ったもの。

「馬場」ばば：軍馬の訓練など行う場所、城域のなかにある場合は城内馬場というが、大抵城域のなかか城域の近くにある

「版築」はんちく：土塁に耐久性をもたせるために、粘質の土と砂質の土とを交互に突き固めるなどして堅く築き固めること。

「堀切」ほりきり：尾根や舌状台地の鞍部に、敵の移動を妨げる目的で、通路を遮断するように掘られた堀。

「堀の内」ほりのうち：堀の内、すなわち城域内を示す地名。

「本丸」ほんまる：城の最も主要な郭のこと。山城の場合は主郭に該当する。

「枡形虎口」ますがたこぐち：枡状の四角い形に土塁や石垣を配置して、その一辺に開けられた開口部から出入りし、四角い空間のなかのもう一辺から郭内に入るように、最初の入口を入った敵は、郭の入口との間にある空間(枡形)で四方から攻撃にさらされるように、防備を強化した虎口食い違い虎口の発展形である。

「的場」まとば：弓矢の訓練をする場所。常磐山八幡宮の裏山にある。

「実城」みじょう：内城、内郭部のこと。

「水の手」みずのて：井戸のこと。昔から水の手を占領されたり、毒を入れられるなどして飲水を断たれて落城した悲話が多い。

「水撥ね施設」みずはねせつ：矢谷口から 400m 谷を登ると「く」の字に曲がった石積みの土塁がある。50m 上方の水堀から放水すると、この水撥ね施設で水の流れがコントロールされるように設置されている。

「水堀」みずぼり：水をたたえた堀、古くは濠と書くことがあった。

「武者溜り」むしゃだまり：城内に入った敵に対して、敵に気付かれぬように伏兵を控えさせて、事に備えるための郭。

「武者走り」むしゃばしり：堀の中や土塁の上の細い通路・堀の内側につくる平地など、連絡その他で、兵が敵に妨げられずに往来できる空間。犬走りと同義語。

「物見」ものみ：城の中か、近辺にある見張り台、敵の侵入などをいち早く発見し、城内に伝えるために築かれた（物見櫓）。

「櫓」やぐら：城の物見などを目的として建てられる建造物、矢倉とも書く。

「櫓台」やぐらだい：櫓の基礎となる広い土壇、虎口の脇や屈折部などで上底が広がった土塁、櫓が実際に構築されたか否かに関わらず、上記の土壇や大きな土塁等を櫓台と呼ぶ。

「矢谷」やだに：水攻めの出来る谷筋。有事の時は、波佐一本松城の搦め手になる。

「横堀」よこぼり：城郭の周囲を水平にとりまく堀。

「横矢掛」よこやがかり：侵入してくる敵の側面から矢を射られるようにすること、さらにそのために土塁に張り出し部。土塁・石垣の屈曲部（側面射撃用障地）。略して横矢。分や折歪をつけるなどする作事をもって「横矢を効かせる」という。

「廊下橋」ろうかばし：橋上の人が渡る部分を塀などで遮蔽した橋であり、城外から矢玉で攻撃を受け易い場所の橋にほどこした。



矢谷（中央の谷筋）・右側が主郭



水撥ね施設



大堀切／東側底部からの眺め



貯水施設の状況



し字型武者走り



貯水施設から北の郭を望む



水撥ね施設



土塁／武者走り



礫石置き場と堀切

# 郷土史年表

時代	年代	郷土に関する事象	
■	前期 300~350	千年比丘一号墳が造営される(墳丘に砥石を配置)。壺・鼓形器台が出土。 長田郷遺跡(甕)。七渡瀬Ⅱ遺跡の竪穴式住居跡。	
	中期 400	七渡瀬Ⅱ遺跡(土器)。	
	後期 500	七渡瀬Ⅱ遺跡(土器)。	
飛鳥 奈良	大化 2年 646	大化の改新。七渡瀬Ⅱ遺跡(住居址)。城ノ前遺跡(土鍾)。	
	大宝 元年 701	「大宝律令」で、「公地公民」の原則にそって宮司の機構によって国政を運用する国家体制が整った。	
	養老 7年 723	「三世一身」の法で、公民に開墾を奨励、輪租田は三代の間は私有化させる。	
	神亀 2年 725	石見国境として波佐の地に勝示を定む。	
	神亀 2年 725	大井谷宮地谷へ大歳神社を勧請。神祇官従五位下河野監物が派遣される。	
	天平 15年 743	「墾田永年私財法」新たに開墾した墾田は永久に私財として認める。荘園化が始まる。	
平安	貞観 13年 871	「三代実録」の記述で、「従五位下 大歳社 従五位上」に格付けされる。	
	承平年間 931-	大井谷の地に恵日山本覚寺を营造する。大井谷八幡岩に宇佐八幡宮より勧請。	
	平安 末期 1165	波佐一本松城築城において、鬼門よけのため大歳社を大井谷の宮地谷より現在地に遷宮する。神祇官役宅は細田に移す(官道が敷設される)。神祇官領「長田別府」。	
	永萬 元年 1165	神祇官領「長田別府」の大歳社「黒金」が年貢注文となる。(永萬文書)	
	寿永 2年 1183	荻野氏、大井谷の八幡岩在来の八幡宮を神託により高天原に移す。	
	元暦 元年 1184	佐々木四郎左衛門慰高綱、平家方の河野城主(波佐一本松城)を芸州より追討。	
	元暦 元年 1184	11月25日付、源頼朝御下文で長田別府を認める。	
	元暦 2年 1185	佐々木高綱、八幡宮を現在地に遷宮し、定紋は、四ツ目結とし、佐々木祖霊神も合祀する。高綱は、武具を奉納し、仏門へ出家する。	
	鎌倉	文治 元年 1185	石見の守護職は、佐々木定綱となる。長田郷遺跡(青磁・蓮弁紋出土)
		建仁 3年 1203	益田兼高が石見守護職となる。
寛喜 3年 1229		三隅兼信、三隅家を立家して木杵・長安の地頭となる。	
嘉禎 4年 1238		北条泰時は、坂上明胤が父定明の遺領であった「長田保」の相続を認めた。	
仁治 3年 1242		2月26日、三隅兼信が永安兼祐に永安別府を委譲したとき、東境として「はさなかをのふたつまつ」とある。(吉川文書)	
正安 2年 1300		普明山に天満宮造営される。	
延慶 元年 1308		三隅入道来り、花城を攻める。	
正和 元年 1312		佐々木刑部、横小路にて地頭。	
嘉暦 元年 1326		12月10日、石見永安別府以下地頭職分文(吉川文書)に、永安別府の四至の内「東波佐堺他領」「南波佐堺他領」とある。	
南北 朝		元弘 3年 1333	後醍醐天皇隠岐を脱し、伯耆に還幸。三隅氏勤皇。
	弘元 4年 1334	足利義氏が上野頼兼を石見に遣して南軍(宮方)を攻める。 2月、来原の合戦。8月25日、波佐谷の合戦。馬場町内が戦火の中心となる。 北軍(武家方)宇津木峠より那賀郡に入り、美又で戦い福屋に迫る。	
	建武 3年 1336	波佐谷の合戦、波佐一本松城主小笠原大学公光。	
	正平 元年 1346	波佐領主宇野孫兵衛。	
	正平 16年 1361	3月11日、足利直冬の安堵状(吉川文書)によると、周布氏の庶子家島居兼元に「久佐郷内波佐清六屋敷田島」などが安堵されている。	

正平	21年	1366	7月25日、大内弘世、金木城を落とす。同26日、大石城を落とす。これにて、石見の大半は大内氏に服す。
長祿	2年	1456	尼子経久生れる。
文明	元年	1469	12月、三隅豊信の知行地として「一ヶ所 波佐郷」とある。(益田家文書)
文明	18年	1486	1月1日、尼子経久富田城を奪還する。
永正	12年	1515	尼子経久、法華経を開版する。
永正	13年	1516	尼子経久、京都東福寺より明海賢宝和尚を請うて、臨濟宗の布教をさせ永昌寺の基を開く。
永正	15年	1518	尼子経久の長男政久戦死する。 政久の霊を弔うために、法華経3000部、銭200貫を永正寺(現・永昌寺)に寄進する。
大永	3年	1523	尼子経久が安芸国東西条(広島市周辺)及び那賀郡南西方面を「切取」。 石見東部三郡を領す。(邇摩郡、邑智郡、那賀郡)
享祿	元年	1528	庄屋役、佐々木肥前守(波佐庄屋初代)
天文	年中		尼子経久、常磐山八幡宮を再建立する。大舞人、小舞人の宮座を配置。例祭日、8月18日～19日。宮座式(左)亀谷、一寸原、漆原、竹河内。(右)中谷、横小路、田屋、弋手(小舞人)栗木田、岡田、惣丸。(御輿持)千谷、西鳥居、坂根、沖ノ原下手、萬代、小野原、畑、神田。(獅舞)大河内。(大穀持)東横屋。(御供持)西横屋名。(敷物持)口屋、中屋。
天文	6年	1537	毛利元就、尼子と絶ち大内氏に属する。
天文	10年	1541	尼子経久、富田城にて死す。 永正寺の明海賢宝和尚、経久の葬儀に赴き、経久の分骨を拝受して帰り、永正寺に墓を造り菩提を弔う。「当寺開基性真院殿月里省心大居士神儀」
天文	11年	1542	田中14代十郎左衛門宣綱、雲州から亀谷へ来住する。宣綱の子、田中对馬守宣連長女登良、久佐将監の妾3年後、亀谷へ男子与一左衛門宣晴を連れ帰る。
天文	12年	1544	波佐の地は、毛利元就の所領となる。
永祿	元年	1558	真言宗天頂山長福寺零落して、今の浄蓮寺が後に造営される。
永祿	3年	1560	10月、亀谷(佐田氏祖)田中与市左衛門、当村に来住す。
永祿	7年	1564	田中对馬守宣連、7月18日没。
永祿	9年	1566	7月、富田城落城する。
永祿	11年	1568	浄蓮寺開祖、能海内蔵助(洞円)横谷(若生)三双船に住し、下横谷を開く。
永祿	12年	1569	明海賢宝座元死す。
元龜	元年	1570	花城落城する。
天正	元年	1573	勝示。夏焼鈔開設する。
天正	年間	1573 ～	亀谷家の祖である田中与市左衛門は雲州富田から波佐の地へ移住する。
天正	8年	1580	柚根、光超寺開創なる。
天正	11年	1583	広島県佐伯郡廿日市で、毛利・尼子合戦の際、速谷神社祠官佐伯式部少輔興藤、その子、藤四郎、毛利に滅亡せられ、同社を祀る者がいないため、亀谷家田中与市左衛門宣晴が親縁により、廿日市平良村に行き御神体を奉供し、当地の速田神社で奉祭する。
天正	15年	1587	「吉川広家領地付立」(吉川家文書)に「七拾貫 波佐」とみえ、波佐が吉川元春夫人の御料所に定められている。「100貫 久佐」もみえる。
天正	17年	1589	円山城主小笠原長旗が戦勝祈願のため佐々木高綱の所用していた鎧などを甘南備寺へ小笠原家の家宝として寄進する。

石峰&抱月のふるさと「地域まるごと博物館」

## 民俗資料回想セラピー

【民俗資料回想セラピー】を実践している資料館



浜田市金城町波佐イ425-5

浜田市金城民俗資料館

### 民俗資料回想セラピーについて

**Therapy**(英語) 薬や手術によらない心理療法や物理療法をいう。

**Therapia**(モダンラテン語) 医学的療法

**Therapia**(ギリシヤ語)

**Therapeuein** 投薬、手術によらない心理療法

### 【メンタルケアセラピー】

民俗資料をアプローチし、本人に気づき、回想を導き、視聴、ディスカッションなどで、過去の体験を回想し「心」の癒しを導き、自己治癒力を促し、認知症の予防、抑制に自己治癒力を増進させることを目的とする。

### 【民俗資料回想セラピー】を実践している資料館

民俗資料を通して、認知症の予防・抑制の「民俗資料回想セラピー」を実施している資料館です。高齢者を対象に収蔵展示している民俗資料を活用した回想セラピーのできる資料館運営を行っています。

かつては、自分たちが使用していた民具を手に触れながら、楽しくおしゃべりや民具を用いた労働慣行の写真映像を観て認知症の予防・進行抑制にケア支援できるプログラムを作成しています。

介護施設入所者や高齢者グループによる、ご来館を是非お勧めします。

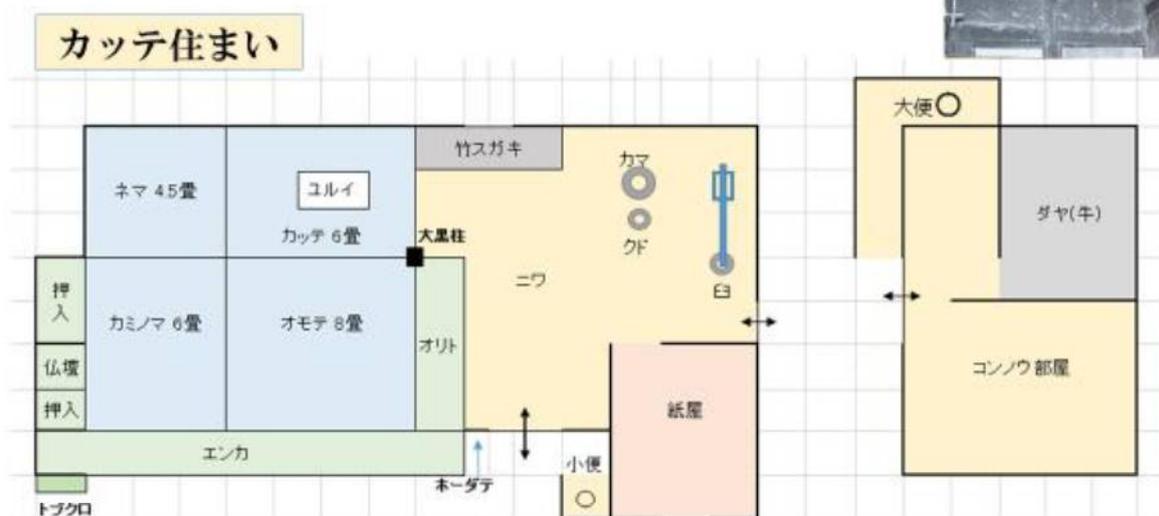
昭和44年から民俗資料の収集と「実践民俗学」を提唱して、収集した民具を用いた労働慣行の動態写真を多数保管・活用している。半世紀前の「民具を用いた労働慣行」の記録写真は、認知症の予防と抑制に映像資料として活用している。

## 【回想セラピー・プログラム】

- I 金城民俗資料館で民具を見学（1時間）昔の道具の使用回想
- II 映像資料による回想（1時間）実践民俗学提唱(50年間で作成して来た）データに基づく映像視聴による回想
- III ディスカッション(30分間)年中行事を中心に意見交換を行い、回想を引き出します。



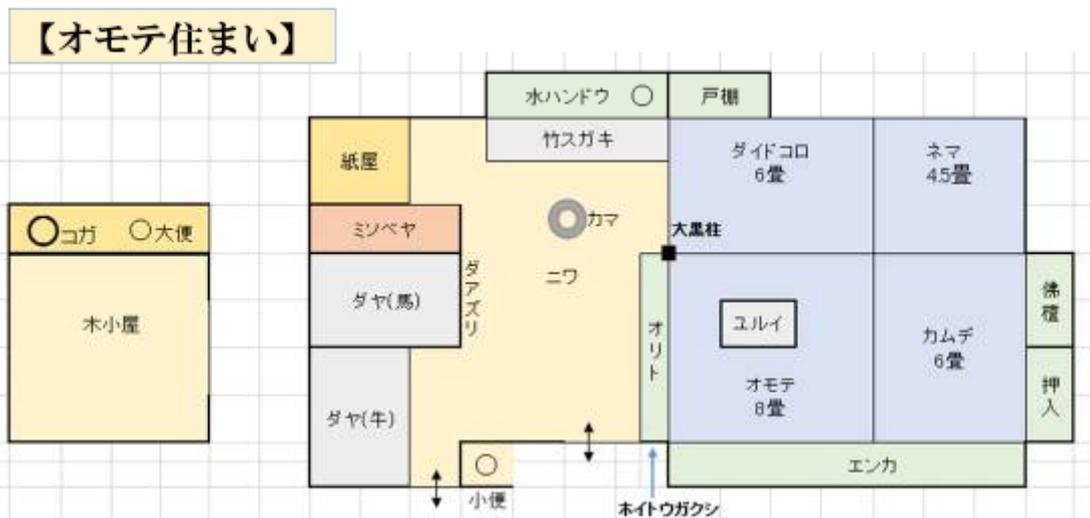
## 昔の農家の図面





母屋と納屋のある風景

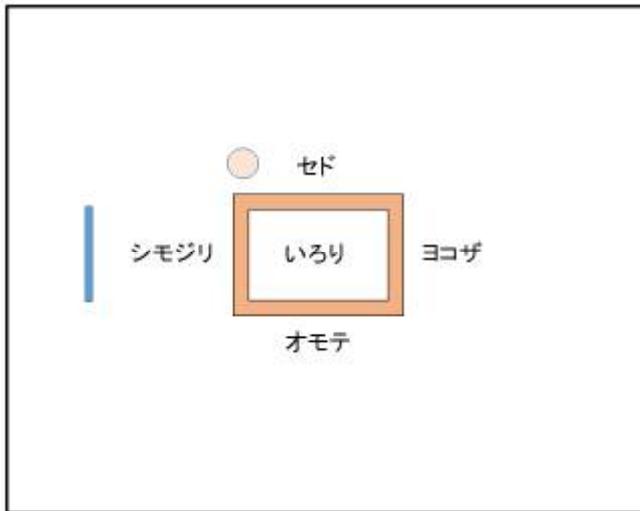
## 昔の農家の図面



### 自・小作農家のこと

自作農は本六の間を作ることができて、床の間は一間半、大黒柱は檜の5寸以上8寸までのもの、柱はカンナ掛け、縁側は上がり下がり縁、庭境は板戸、ユルイと勝手の間は腰高2尺の戸、上の間は普通障子であった。

小作農は本六の間は作ることができず、下六（四畳は天井が平で二畳については天井が片方3尺下げる）の間に限られ、縁側は上かり下がり縁は作られず、大黒柱は全部が前チョウノ打、庭境は板戸で、その外は障子戸、床の間は作られないこととなっていた。



【いろりの名称と機能】

「ヨコザ」  
家長が座る場所

「オモテ」  
来客者が座る場所

「セド」  
家の主婦が座る場所

「シモジリ」  
家長・主婦以外の座る場所

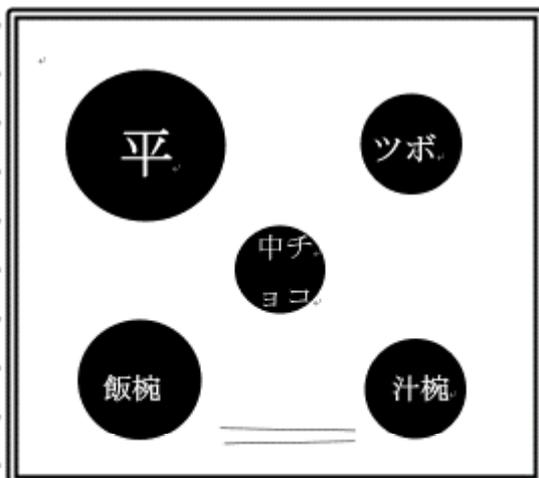
## 仕事始め：1月7日

### 【一日の仕事量】

草履	12足
地ワランジ	12足
ワランジ	8足
先ツマゴ	4足
先ツマゴとワランジ	1足そろえる
足袋ツマゴ	1足
引緒	2かけ(4本)
ハラビ	8本
ムナガワ	1本
ニコウ	3かけ(6本)



本膳(高足膳を用いる)。



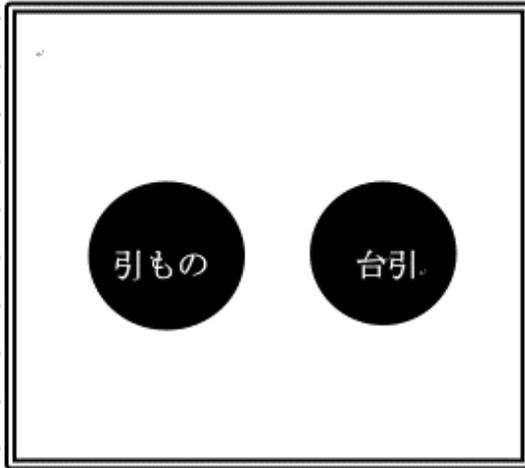
平 ノッペイ汁(こくしょう汁)。大根、ニンジン、ゴボウ、キンカイモ、エグイモ、最近は、カタクリ粉を入れる。油を用いる。

ツボ 大根すり。

中チョコ 昔は、ナラ着けや沢庵。ゼンマイ、コンニャクの和物、豆腐を用いる。酢牛房を入れることもある。最近では、タコ、イカの酢物。

汁 豆腐、ワカメ。

二の膳(会席膳)※ずり膳ともいう。

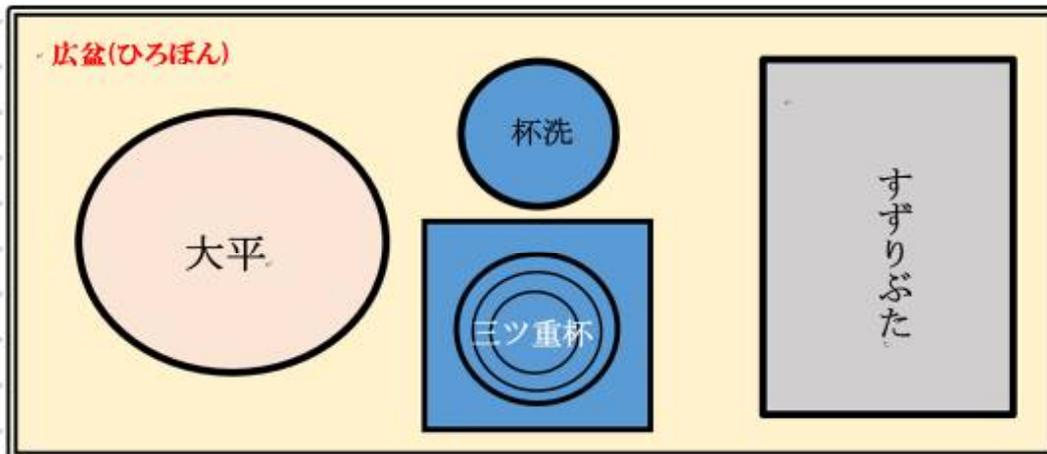


ヤマイモ、大根、ニンジン、ワラビ、油揚げ(チソの実、イモ)、パレイシヨ、  
※婚礼の時は、昆布を加える。スボドウフ。

婚礼、歳祝い、報恩講(三部経の時)。

酢ゴボウは、半紙に包み藁スボに入れて、堅くなるまで湯でる(塩を入れる)。

※スボとは、藁を簀に編んで豆腐を包み用いる。



昭和初期ごろまで使用された。こくしょう汁(のっぺい汁)を大平に入れる。杯洗には、水を入れて出す。すずり蓋は、大切にした野菜などを盛る。この広盆は、会席の席の中央に出して、一同の目を見て目の前で給仕人が、各々に木皿に大平に入っている、こくしょう汁(のっぺい汁)を盛って座の人に配る。すずり蓋の中には、大根、ニンジン、ゴボウ、豆腐など5~7種類の料理を盛って出し、同じく、各自の「てしょう」に装うのである。多客の時は、広盆を二個用いることもある。婚礼の時は、広盆の他に皿鉢を高足膳に乗せて、刺身を盛って出した。

## 花田植

大花田植の起源は「田囃子台本」や「代掻き台本」などによると江戸時代後期頃から盛んに行われていたことが伺えます。大花田植は「大田植」、「大田伶」、「大代」などと称されていました。神仏混合による「サンバイ神事」や「牛供養」が併用される点が特徴です。

波佐地方における田囃子は、江戸時代から伝統を受け継ぐ六調子の囃子で、特に稲作の飢饉の翌年には、凶作であった隣村に各農家から玄米を抛出、特牛を代掻きに出し、大田植え(サンバイ神事)を行って、その年の豊作を祈願していた。



# 農作業の流れ



荒起こし作業



田仕事

代掻きとエブリ差し

1975. 5. 21



田植組の共同田植



千穂抜き

1975. 11. 25



湯白挽き

1975. 11. 25



農作業

ワザつき



# 麻蒸し作業の流れ





在るがままの現実に即して  
全的存在の意義を髣髴す  
觀照の世界也  
味に徹したる人生也  
此の心境を芸術といふ  
明治四十二年『近代文芸之研究』

## 抱月家族三代の係累

### 祖父 佐々山一平

広島県戸谷村出身、若い頃、長沢鉦に居たが、  
佐々田家の要請で白甲鉦に着任。文久3年田野原鉦支配人。



### 父 佐々山半三郎

白甲鉦で弘化3年生まれ。文久3年に田野原鉦へ、  
明治3年、一平を襲名、高源鉦、大前鉦の支配人を歴任。

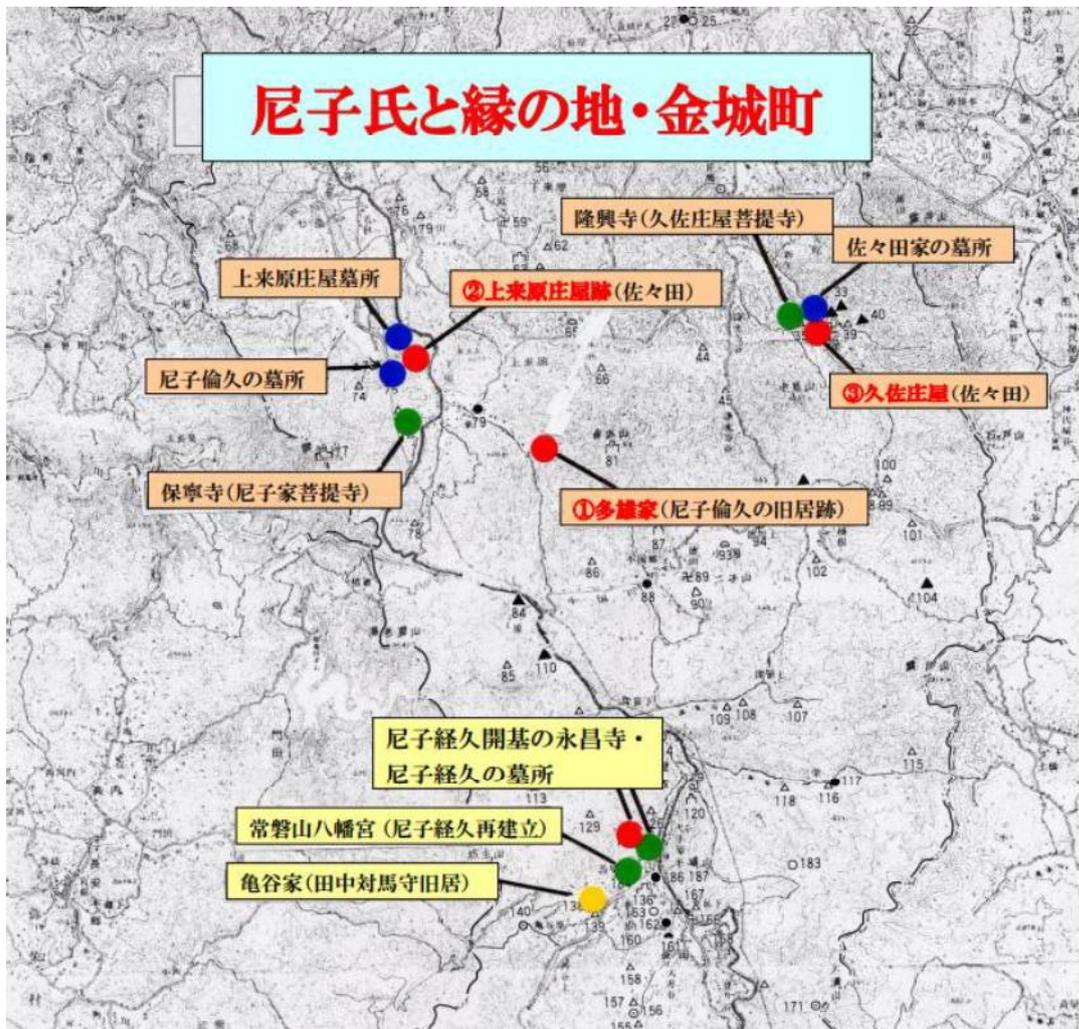


### 佐々山瀧太郎

明治4年生まれ。島村文耕の学資支援を受け島村家へ入籍。

## 抱月三世代の年譜

- 天保 11 祖父一平は、波佐の長沢鉦から佐々田家に請われて白甲鉦支配人として着任。  
11 三浦彦太郎あて長沢鉦の借財返済計画を送る。
- 弘化 2 6 佐々田家へ千両箱を貢ぐ。浄光寺を再建する。
- 弘化 3 3 父半三郎白甲鉦で誕生する。
- 嘉永 1 1 津和野藩へ1,200両献金 苗字御免名披露格で「佐々山」姓となる。
- 安政 5 5 次男小太郎白甲鉦で誕生する。竹岡頼母子議定金(20両掛)13名に佐々山一平参加。
- 安政 6
- 万延 1
- 文久 1 9 桑原新吉発起「思寄」(頼母子講)に一平も参加していた。
- 文久 2
- 文久 3 12 田野原鉦打入れとなり一家は移転。
- 元治 1 父半三郎・チセと結婚。9 祖父一平死亡。半三郎は18才。
- 慶応 1 5 久佐櫛本与三郎30両。8 木束医師寿助6両。8 上来原勘治6両。9 酒屋新八郎、金10両。11 九平30両。12 山方惣代貞四郎25両。
- 慶応 2 3 半三郎、田野原鉦鉄山を退去。下土居に移る。7 ケイ出生後死亡。
- 慶応 3 4 二ヶ寺(浄光寺・隆興寺)へ嘆願口上書を送付。8 最中山神社へ絵馬額奉納。
- 明治 1 大利鍛冶屋で日雇い生活を送る。
- 明治 2
- 明治 3 9 「苗字御免」を契機に一平を襲名した。佐々田家から和解で12 高源鉦打入れ。チセは下土居で臨月を迎える。
- 明治 4 1 長男瀧太郎が生まれる。一平所有の「中屋名」を森平右衛門が小作請人となる。
- 明治 5 2 浜田地震発生。高源鉦壊滅。大前鉦を打入れで、一家は大前鉦所へ転居。
- 明治 6 大前鉦で生活。
- 明治 7 米相場が急騰した。石見地方の鉄山が議定書を交わす。11 次男雅一が生まれる。
- 明治 8 相場で失敗して失脚、「中屋名」屋敷町15坪に家宅を構えて大前鉦から移転する。  
12 「堤防積金算用帳」によると18銭6厘佐々山一平。
- 明治 9 2 「大前鉄山20年間譲渡」負債整理を佐々田家に預ける。
- 明治 10 1 「中屋名」を佐々川只右衛門へ売却、負債整理。3 再び、下土居へ移転。  
一平の弟小太郎は、これを機に広島県戸谷村入澤家へ入籍。
- 明治 11 4 三男寛一が生まれる。 11 小国村民6名が頼母子講返掛け残債処理で一平を救済。
- 明治 12
- 明治 13
- 明治 14 5 久佐村熊屋へ一家5名(一平、チセ、瀧太郎、雅一、寛一)が移転。長女イチが生まれる。
- 明治 15 6 久佐小学校上等第6級定期試験採点表
- 明治 16 卒業した瀧太郎は濱田の薬局の見習い生として住み込み、小学校高等科に通学。家族は、久佐村179番舎へ転居。28年暮れまでいた。



上来原「多雄家」  
 尼子倫久永禄 13 年(1570)  
 尼子倫通(倫久次男)  
 尼子宗久  
 尼子宗嗣  
 ↓  
 上来原庄屋  
 佐々田通久  
 (佐々田重久)  
 佐々田基久(重久次男)  
 ↓  
 久佐庄屋  
 佐々田重久  
 佐々田康久(重久長男)

尼子元知(尼子倫久の長男、毛利  
 の仲介で尼子義久の養子となる)  
  
 慶長元年(1596)毛利氏の命により  
 银山御料御番所支配頭鉄山方取  
 締官として、久佐に着任。  
 (慶長 5 年迄)

## 石見地方の鉄山地域図



毛利元就の領地時代那賀郡の鉄山地域が後の津和野藩の飛び地となった。

永禄13年(1570)尼子倫久が毛利氏の家臣山内元通の娘を妻に娶い、**上来原・多雄**へ移住。

慶長元年(1596)尼子元知は、石見銀山御番所支配人として、**久佐**にて、鉄山方取締将官として、毛利元就の命を受けて着任している。



前列左から、倫通の墓、倫通の墓、倫久の墓、倫久の墓。後列左から宗嗣の墓、宗久の墓

尼子経久のひ孫に当る ①尼子倫久(多雄家)から5代目の通久の代に ②上来原庄屋役を命ぜられ佐々田姓とし、役宅を中来原(下ノ原)に移転したことにより、多雄家の墓所を庄屋屋敷の西ビラに移転させた。通久は佐々田の祖となり上来原庄屋の墓所は別途北側の丘陵地に営造した。重久(通久の子)の代に久佐庄屋役を命ぜられ長男康久を連れて ③久佐庄屋役となり、久佐の「間所」へ移転した。上来原庄屋役は、基久(通久の孫)が引き継いだ。

佐々田庄屋の係累(佐々木⇒尼子⇒佐々田)

多雄家	①尼子倫久	元和9(1623)没	※長男=元知、二男=宗久
	②尼子宗久	寛文元(1661)没	
	③尼子宗嗣	万治3(1660)没	
	④尼子倫通	元禄10(1697)没	
上来原庄屋	①佐々田通久	元禄11(1698)	
		享保9(1724)没	
	②佐々田重久	享保6(1721)	
	◎長男康久を連れて久佐庄屋へ		
	③佐々田基久	宝暦9(1759)	
	(次男)	明和4(1767)没	

上来原庄屋⇒久佐(間所)庄屋へ分家

久佐庄屋	①佐々田重久	寛延2(1749)
	②佐々田康久	宝暦2(1752)
	③佐々田芳久	安永元(1772)
	④佐々田久哲	天明3(1783)
	⑤佐々田義三郎	文久2(1862)
	⑥佐々田弥高	元治元(1864)
	⑦佐々田十助	慶応3(1867)

重久が上来原で鉄山経営に携わり、久佐庄屋へ移転後も、白甲たたら場など広範に渡り代々鉄山経営に携わった。

## 仮説

文政6年(1823) 入沢関係で一平生誕? 当時は長沢鉦

天保11年(1840) 一平17歳で白甲鉦支配人へ

佐々田家が小国村芦谷鉦を経営中に支配人が自害したため、急きよ  
佐々田家からの要請で一平が支配人となった経緯がある。

弘化3年(1846) 一平23歳・半三郎生誕

明治4年(1871) 半三郎25歳・抱月生誕

半三郎の弟小太郎が明治11年に入沢へ入籍

### 鉄山で一世を風靡した一平

祖父一平の時代は、「たたら製鉄」により、弘化年間には、相当な純益を上げ佐々田家へ千両箱を貢ぎ裕福に導いた。

嘉永元年(1848年)正月5日、津和野藩へも1,200両を献金して、同年正月19日付で苗字御免名披露格が許され、「佐々山」姓を名乗った。そして、久佐村の浄光寺を師匠寺とし、佐々山一平が壇頭となり、浄光寺の本堂の再建を行った。

### 田野原鉦

久佐村白甲鉦周辺の木炭の原木が減少したため、新たに小国村(浜田市金城町小国)田野原鉦(持人・佐々田弥高)132坪(横11間、長12間)の打ち入れを祖父一平と父半三郎の手によって、文久3年(1863年)12月に構築して、佐々山一家は、田野原鉦へ転居した。越して来た佐々山一家は、「吹小屋」を中心に鍛冶屋1軒、本屋1軒、土蔵1軒、下小屋20軒の山内の規模であった。「田野原たたら」において、一平の息子半三郎は、益田の大谷チセと結婚した。順風万端な中、元治元年9月23日に祖父一平は永眠した。

慶応2年春には、半三郎一家は、鉄山を追放され、小国村下土居123番舎(市原家所有)へ転居。同年7月28日、チセは、長女ケイを出産するものの直ぐに他界させる不幸が重なった。この間の生計を繋ぐため、一時は、大和鍛冶屋で日雇い生活が続いた。

慶応3年4月、久佐村の浄光寺と隆興寺宛てに嘆願状を送り、佐々田家との和解の執り成しを願い出た。同年、半三郎は、和解嘆願祈願を籠めて、氏神である最中山神社へ「絵馬額」一面を奉納した。

### 鉄山の掟(おきて)

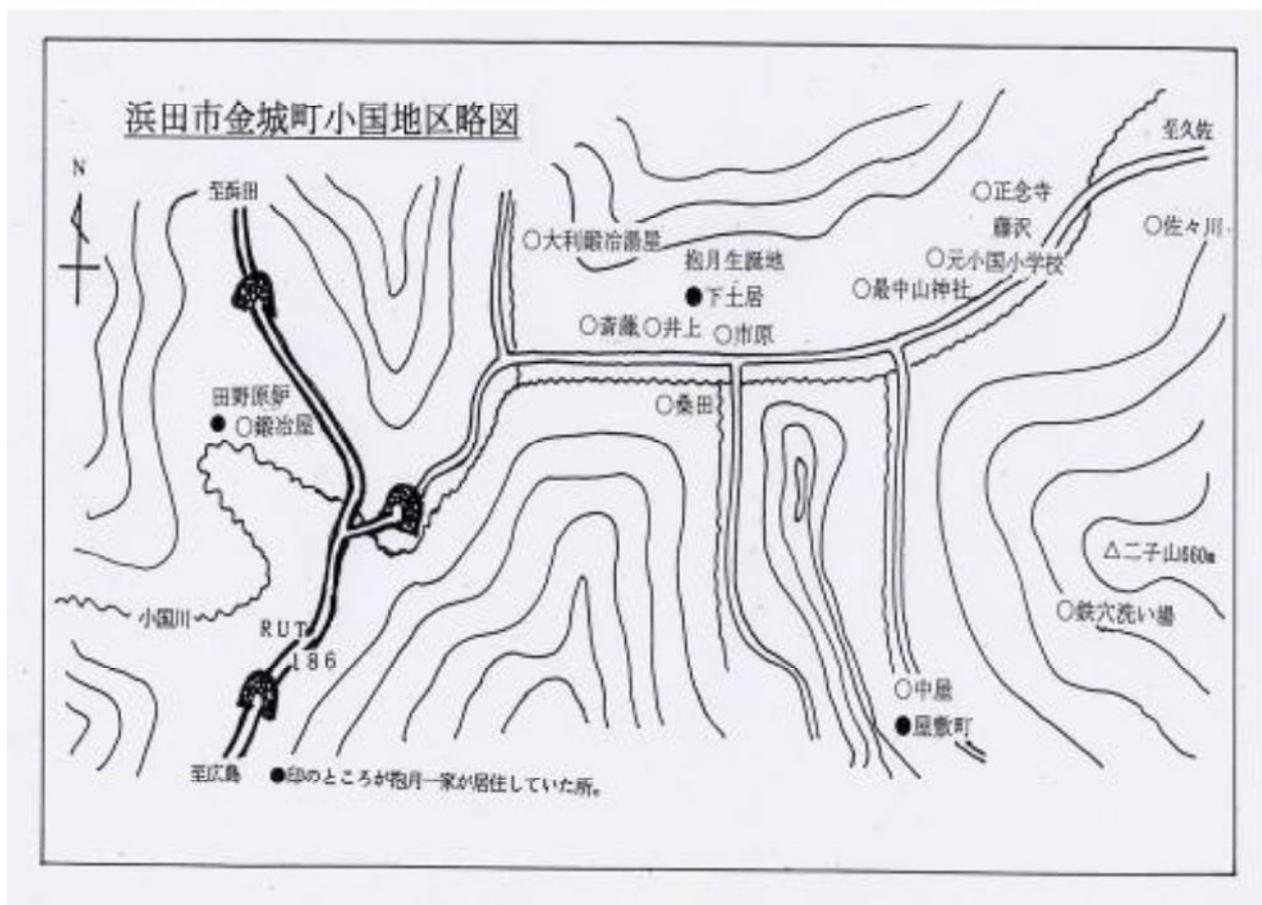
鉄山では、「月・水ノ有ル穢女ハ、7日ガ間不入ラ鑪ノ内エ、子ヲ生タル時、女ハ33日不鑪エ、其夫ハ17日ガ間不入。産後ノ女ト同火不喰事30日」(『鉄山秘書』鉄山ニ血ノ穢ヲ忌み嫌の項による)によって、鉄山勤めの一平は、臨月を迎えたチセを「下土居」に置き、1里離れた高源鉦に泊り込み鉄山再起に傾注した。

## 抱月の姉ケイの死亡との因果関係

ケイ没 慶応2年(1866)

抱月誕生	明治4年(1871)	
大前鉄山退去	明治8年(1875)	ケイ7回忌+2年後
久佐村へ転居	明治14年(1881)	ケイ13回忌+2年後
4男義治没	明治18年(1885)	ケイ17回忌+2年後
抱月廃嫡	明治24年(1891)	ケイ23回忌+2年後
母チセ没	明治28年(1895)	ケイ27回忌+2年後
	明治34年(1901)	ケイ33回忌+2年後
父一平没	明治38年(1905)	ケイ37回忌+2年後
抱月没	大正7年(1918)	ケイ50回忌+2年後

※弟・父・母・抱月の没年と年回忌+2年が一致する。



一平襲名と和解で高源たたら打ち入れ

明治3年9月19日付、「苗字御免」を契機に、父半三郎高源鈿の打ち入れを任された。同年12月に小国村蔵方の桑原新吉より佐々山一平名で米3石を借り入れ、新たな気持ちで鉄山をスタートさせた。

『明治三年小国二ヶ村午納米人別指引帳』によると、明治3年12月25日に米三斗を借用している。

## 抱月誕生

小国村下土居にて、瀧太郎(抱月)が誕生した。下土居の右手瀬戸の小さな谷川がある。普段は水の流れは少ないが、一雨振ると滝のように急流を流れ落ちる。父半三郎はこの滝のような流れと長男であることから瀧太郎と命名したのではなかろうか。

## 浜田地震

明治5年2月6日、浜田地震(M7)が発生。石見地方一円が被害をこうむった。「高源たたら」は、壊滅した。このため近くの「大前たたら」を開設し、抱月一家は、転居していった。

### 大前たたら⇒「中屋名」屋敷町へ

一平は、この頃株相場に手を出し高額な借金を背負い込んでしまった。7年暮れには借金の催促を受け途方に暮れ、再び佐々田家へ災難を持ち込んでしまった。

翌8年(1875年)には大前鑪から、鉄山退去を命ぜられ、一平の持分である小国村『中屋』名に再び帰ってきた。もともと、「中屋」には、阿妻氏へ小作請けさせていることから、一平は「中屋」の少し上手の畑の地名「恩田平(おんたびら)」の山裾の荒地15坪ばかりを開き佐々山一家は移った。現在、この土地は、戦後に田地を造り替え土地台帳では「恩田平」となっており、明治時代より坪数が増えている。

### 「中屋」屋敷町⇒下土居

明治10年1月、「中屋」名田・畑・宅地を佐々川只右衛門へ売却して負債整理に当たった。明治10年3月21日、下土居に再び戻ってきた。

祖父一平の実弟、小太郎は、広島県戸谷村の入沢家へ養男として独立していった。

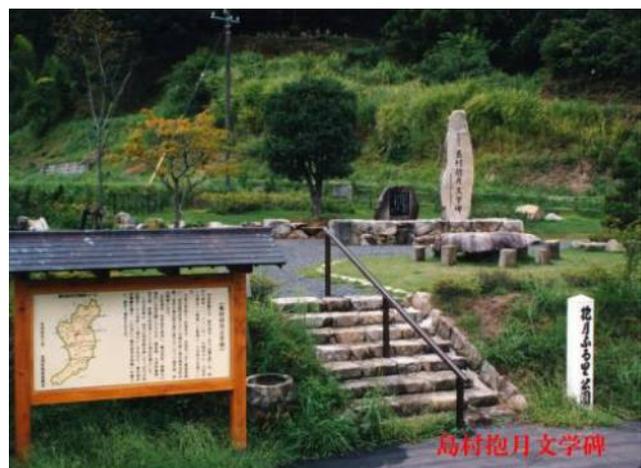
### 下土居⇒久佐村「熊屋」へ

佐々山家が小国村を離れたのは明治14年(1881年)5月2日であった。佐々田家と再び和解して一家五名(一平、チセ、瀧太郎、寛一)は、久佐村(金城町の久佐)162番ノ1舎に落ち着き、小原谷の『熊屋』で苦難の新生活を始めた。瀧太郎は明治14年、15年(1882年)を久佐村の久佐小学校(久佐八幡宮)で学んだ。

抱月の回想によると「熊屋時代」の家族が一番平穏で幸せであった時期だという。

## 故郷の父

私の十ばかりの頃は、(明治14年ころ)一家が久佐といふ田舎に住んでゐた。(熊屋)家は四、五十坪ばかりの前庭を取って、芸州境への小街道に沿うた(芸州街道)瓦葺の一軒家で後ろは深い谿谷になり、そこから可なり水嵩のある小川が横手をめぐって流れてゐる。街道といっても人通りは極めて稀であるが、其の道を挟んで、向ふには青田が広がり、其の向ふは又山になってゐる。(熊屋から見た)



## ふるさと熊屋時代を描写した文学作品『故郷の父』

或る夏の夕暮れであった。夕食を済ませた後、家内中前の縁側に出て涼んでみると、何処からか蝙蝠が、一疋飛んで来て、軒のあたりを高く低く飛び廻る。私や二人の弟やは総立になって騒ぎ出した。すると、今まで晩酌の微酔顔をわざとむづかしさうにして煙草盆を前に控へ、煙を吹かして居た父が、だしぬけに立ち上って、長押に懸けてあつた櫂の丸扱の一間棒を小腋にかかへ、尻端折で跣足で飛び下りた。びっくりして見てみると、父は撃剣をやるやうな身構へと、気合をかけるやうな掛声とで、頻りに其の棒を扱いたり、水車のやうにくるくる廻したり、門の恰好に構へたりしながら、蝙蝠を相手に棒使ひを始めた。

棒と撃剣とは父がこくなくに零落して以後の、唯一の自慢芸であつたのだ。上になつたり下になつたりして、暫く相手になつてゐた蝙蝠は何時か飛び去つて了つたが、父は尚盛んに空に向つて独りで棒を使つてゐる。其のうち日は段々暮れて、夕月の光が一杯にそこらを浸して来た。其の月影の下で、磨いた櫂の棒が、否妻のやうにきらきらと光る。母はほほ笑みながらじつと見て居た。私は強い豪い父だと思ふと同時に、何だか其の猛烈な勢が、幼心に物凄くて、慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな気持を覚えた。

父はやがて棒の手を収めて、汗を拭きに小川の縁へ降りて行く其のあとをぼんやり見送つてゐると、遙か筋向ふに二軒並んで立つた農家の前で、据風呂の火の赤く燃え立つのが見えた。二人の弟は其のときもう母と一緒に蚊帳の中に這入つていた。

今から考えると、父はあの時、心に佐々木巖柳の燕返しや、宝蔵院の水月の槍の伝説などを繰り返して居たのたらう。其の父が故郷で不慮の死を遂げてから、今年は七年である。

『故郷の父』より転載

### 熊屋 ⇒ 浜田へ

明治16年(1883年)に、抱月は久佐小学校を卒業し、小国村の恩師桑田俊策の紹介で浜田町(浜田市)の薬局の見習生として住み込み小学校高等科に通学した。

明治17年(1884年)7月18日付で松江始審裁判所浜田支庁の給仕(日給8銭)として採用される。

明治19年(1885年)10月、島村文耕が浜田支庁へ着任し、瀧太郎の上司として運命的な出会いがあつた。

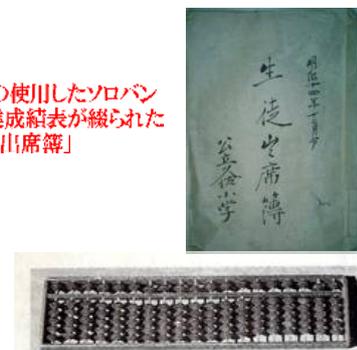
明治21年(1887年)11月に瀧太郎は「雇」に昇進し、月給5円が支給された。島村文耕は瀧太郎の持ち前の向学心を読み取り、上京させて勉強させようと考えた。

### 抱月二十歳の決断

明治24年(1891年)春に、文耕は再び父一平に抱月との養子縁組を迫り、とうとう認めさせ、3月21日、願いにより廃嫡。

同年6月13日、付、神奈川県都築郡都田村大字池辺2613番地島村文耕と養子縁組をなし、「島村瀧太郎」として島村文耕の養子入籍となった。

抱月の使用したソロバンと学業成績表が綴られた「生徒出席簿」



『浜田港』に寄せた序文

浜田港とは懐かしき名なり。

予が小学校時代と独学時代の記憶はすべて浜田にあり。

粟島下の水泳に危なく溺れ死せんとし少年の思い出はあわれ三十年の昔かな。

瀬戸ヶ島の翠畑今も当時のままなりや。

一丁田の丘に狐の火を見ながら、片側町の夕暮れに淋しくたたづみし日の事も夢の如く我が胸に残れり。

—8—

山陰の最底辺たる石見国は土瘠せて人の心また石の如く堅きが多けれど古は歌聖人麻と画聖雪舟とに万代不滅の足跡を遺させたり。

陰陽山脈の険しき陰には、近世文明の波に洗われざる上古素朴の風今尚残れり、北海の岸には倒れるところ天縦の奇景を有す。

大正三年の今日、鉄道未だ此の国に入らざれども何人かあって此の国を天下に推薦するものあらば日本に一名区を加うると共に予等郷党の喜びいかばかりぞや。

浜田港は石見の首都にして山陰道の最底辺に点ぜられたる眼目なり。

此の町の前途に必ず繁あるべし。

光輝あるべし。

大正三年五月

島村抱月 識

抱月、20歳の決断と父母の気持を察するに余りあるものがある。

抱月の知られざる内面

抱月の子煩悩ぶりは、余り知られていないが、抱月の3ヶ月間の書簡によって、その内容が汲み取れるのである。3月27日、震也、君子、春子の学校仕度について、3月29日、震也の通信簿の件(中山晋平、春子、君子宛も)、4月1日、震也の病気、転地療養について、4月5日、震也が「市ヶ谷へ転校しても良い先生がいるだろうか?」と心配をしている様子、4月17日、震也の学校教師の件、5月16日、中山晋平宛、歌のアドバイスなど。巡業先から書生として寄留している中山晋平の下へ頻りに手紙を届けているのである。

また、ロンドンで買ったカメラを携え、時々、近郊へ子供たちを連れ出して撮影し、自分で現像する楽しみを覚えたのである。中山晋平が、震也、君子と3人で写っている写真がその雰囲気を与えている。

抱月は、芸術座を束ね全国巡業で公演するためには、一座の20数人に旅費・給金を支払い、数か月前から興行先の交渉、チケットの販売依頼、会場の手配、公演演目の選択、一座の稽古、脚本の翻訳と演出など5年間にわたり、すべてを一人でこなしていた。正に、商業演劇の種を蒔くために不眠不倒の戦いをしていたのである。

これらを総合すると、抱月は、演劇のみで、家庭を振り返らない人ではなくて、我が子らに強い愛情を注いでいた人間味溢れる一人の父親であったことが分かるのである。

故郷へ錦をなぜ飾らなかったか

帰去来故郷はやがて魂祭り

(第一の理由)

山陰線が当時は、石見大田駅までの開通であった為に輸送手段が無かったため。

(第二の理由)

海外、日本全国津々浦々に演劇の種を蒔き二元の道(芸術と経営)を両立させるべく実践活動を遂行した。人生50年を想定して故郷に錦を飾るのはまだ思い半ばであった。



友人より「活眼」を頂く  
チベットとはどんな国？

鳥葬・タルチョ

教学論集

ニューナショナル・リーダー

初めての夏期旅行 (M19)

寛の宗教観 (M19)

普通教校の成績 (英語 91.8 点)

予科 (M19.3) ⇒ 本科 (M20.3)

『弘法大師一代記』を読み感化

普通教校の大行軍 (M20、M21)

良師を求めて

① 南條文雄

② 小栗栖香頂

③ 小永井小舟

④ 吉谷覚壽

⑤ 石川舜台

⑥ 島地黙雷

⑦ 大内青巒

普通教校閉校式 (M21.12 知恩院)

大学林の学内紛争

M21 年より哲学館館外員

オルコット (『仏教問答』の著者)

アナガーリカ・ダルマパーラ

英文会 (E.C.S) と『NEW BUDDHIST』創刊

文学寮本科第二年級甲生 (M22.1.28)

東温譲の送別会でチベット探検の必要を吐露

『教学論集』を通して良師を求める

学資金欠乏により帰郷

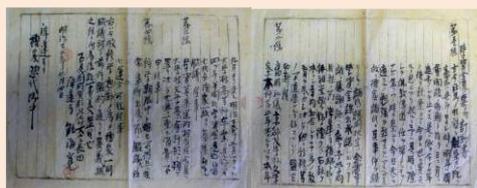
石見学場で宗教学を聴講

学資金に付き訂約書を交わす

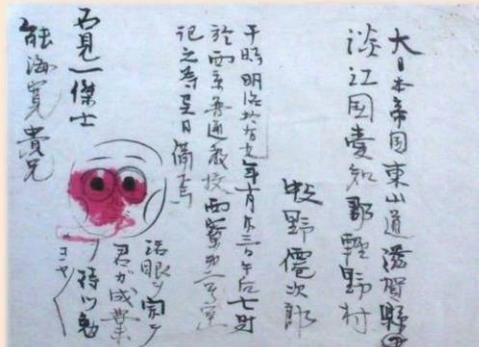
「エコノミー」へ出納を記録する

E.C.S のその後

英語力で「新仏教徒」運動を展開



学資金募集二村訂約書 (明治22年9月4日)  
明治22年9月4日付、檀家総代と後住職になる事を条件に訂約書を交わした。向こう4年半で270円の学資金を支援するもので、寛は慶応義塾を1年間、哲学館を3年間学び、郷里へ帰り、チベット探検の宿望を果たした。



良師を求めて ①

南條文雄(なんじょうぶんゆう、嘉永2年5月12日 - 昭和2年11月9日)は、日本の明治・大正期に活躍した仏教学者・宗教家。字は碩果、松坡。寛の梵語学の恩師で、西藏探検行の支援者。

近代以前からの伝統的な仏教研究の上に、西洋近代の実証的・客観的な学問体系と方法論を初めて導入した。早い時期から仏典の原典であるサンスクリット(梵語)テキストの存在に注目。主要な漢訳経典との対校を行なうとともに、それらの、成果をヨーロッパの学界に広く紹介するなど、近代的な仏教研究の基礎形成に大きな役割を果たした。



ヘンリー・スティール・オルコット  
アナガーリカ・ダルマパーラ

明治22年2月、オルコット氏に随行・来日各宗派の管長会議(130名)も知恩院で実現



仏教問答 オルコット ダルマパーラ スリランカ

来日4か月間で、全国33都市・76回の演説会を開いた。日本仏教の復興に活を入れた。

寛は、仏教を英文により発信したいと考え、普通教校の同級生47名を束ねE.C.S (English Composition Society) 即ち「英文会」という組織を立ち上げ、21年(1888年)10月14日に週刊機関誌『NEW BUDDHIST (新仏教徒)』を創刊し、毎週日曜日に校内で発行された。翌年4月発行の28号まで続いた。

新仏教徒の目的

「諸君は、仏陀の偉大な業によって生まれた。全ての衆生と喜びを享受し、真理の樹から因果の果実を摘み取り、モラルの庭園で手ずから美味を味わうために、E.C.Sはそのような新仏教徒の目的を成功させるために組織したのだ。」と能海寛が記述している。



英語力で「新仏教徒」運動を推進

「The Literature」(文学) 普通教校時代

↓  
『New Buddhist』(新仏教徒) 普通教校・文学寮時代

↓  
『Wisdom and Mercy』(智恵と慈悲) 慶応義塾時代

これらの推移を見ると、寛の発想力と着眼点、そして、友人を吸引し、束ねる能力の卓越していることに感心するものがある。

## ②「信後の行」～有言実行の生き方（青年期）

### 学資金の調達

「信後の行」について

大谷派本願寺事情聞書

住職検査について

『教学論集』

「春秋日記」から

学校選びに葛藤

寛のペンネーム

慶応義塾について

科目・入社金・請人

将来の希望(学校設立・石峯堂設置)

E.アーノルド卿との交流

W.ウエストンとの交流(「春秋日記」から)

親鸞聖人の歌

オルコット氏の影響

「Wisdom and Merxy」

慶応義塾4級生

20名で東京版E.C.Sを立ち上げる

懺悔の親書

東北紀行(M23.7)

義父から慶応義塾転学を懇願

英語夜学会で学ぶ

往復書簡で寛の行動を補完

哲学館と井上円了

哲学館講義録

卒業記念写真(M26.7.7)

「春秋日記」

義妹末子の逝去

富士山登山と歌

身延山巡礼

東京南東紀行(自画像)スケッチ

愛用の尺八

二河白道の英訳

各種教科書

中西牛郎の新仏教論

探検決意の深層

### 「信後の行」について

寛は、自らを釈尊の弟子と位置づけ、大無量寿経下巻の「勤行求道徳」、「行道進徳」、「不識道徳」、「不達於道徳」、「教語道法」、「不信道徳」等道法に背くな、道法を守れと自戒している。

小林洵の言葉を借りて「信ヲ先ニシテ後ニ余暇ヲ以テ真理ヲ研究スベシ」小生は信を先にして学問を第二になすと心に決めているからご安心くださいと述べている。

信=宗教に帰依すること。言をたがえないこと。

### ペンネーム

寛は、ペンネームを幾つも使い分けていた。2月1日の「春秋日記」で「能海寛 法名を法流と号す。しかれども洞達又は神通、航雲とも称せんとす。字は石峰、石岳、清陽等と稱し、寛をば堯寛と改めんとす。寛、堯寛、法流、神通、洞達、航雲、航天、天頂山、石峰、石岳、清陽、心月堂主、自脩社の主たらんとす。宙音も予の名……。」という称号を沢山考えていた。雑誌『佛教』では天頂山として寄稿している。

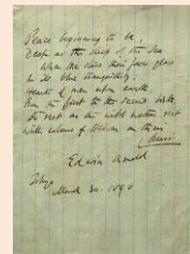


慶応義塾長・福沢諭吉

慶応義塾の創設者。「学問のすすめ」を広く浸透させ、実学の契機を推進した。外国人の教師を採用して洋学の普及に努めた。



E.アーノルド卿から寛が頂いた英詩



坪井正五郎の人類学  
 経緯同盟会名簿  
 鎌倉・二見での講演  
 『世界に於ける仏教徒』の出版  
 雑誌『仏教』のこと  
 各種会員証  
 高嶋を詠んだ歌 (M28.7)

東京南東紀行  
 巡礼  
 出納帳・印鑑  
 「口代」(遺書)  
 探検行の試算  
 本山上納金と院家  
 寛の係累  
 報恩講巡回日記

南條博士より  
 高楠順次郎の帰朝記念写真  
 『仏教』への寄稿(ペンネーム)  
 三伽会(能海、白山、子安)  
 大経「仏説無量壽経」梵語翻訳完成  
 愛読書  
 新書購入記録  
 葉書・書簡の受入登記簿  
 下書き原稿

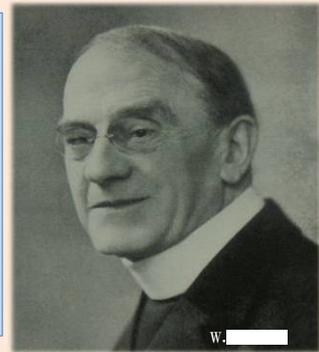
『水交社記事』  
 『日本主義』  
 『日本之教学』  
 嘆願・履歴書・入蔵予定  
 渥美契縁

『墨染集』(記述綴り)  
 波佐倶楽部(メンバー・輿地誌略)  
 国際化の学習(『四地誌略』を使用)  
 海外布教支援  
 詠帰舎と宮島大八氏

「白川問題」  
 高楠順次郎写真  
 明治30年の情報収集  
 ロシアとトルコ(ニコライ2世)  
 婚約に至る経緯 (M30.10)  
 二人揃って上京 (M30.12)  
 東京での日課 (31.1)

外国人とも親しくしていた

イギリスのウォルター・ウェストン(宣教師・登山家)と慶応義塾で明治23年に出会って親交を深める。  
 登山について能海寛にいろいろと助言した。  
 「春秋日記」でも数々話したりきき記述している。  
 ウェストンからは、クライブ伝の授業を受けた。  
 翌24年7月には寛自身が富士山登山を行なった。やはり、ウェストンの影響を受けたのだろうか。

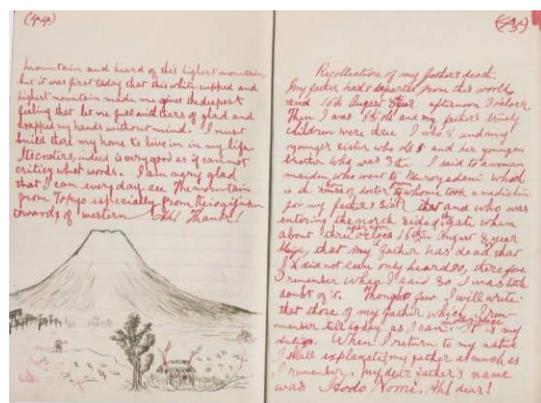


オルコット氏の影響を受ける

オルコット氏の著書『仏教問答』が出版されるや、瞬く間に16か国語に翻訳された。  
 世界共通語の英語の発信力の強さを寛は実感した。  
 仏教を英訳することに奔走し、京都普通教校でECS(英文会)を興す。梵語と英語の重要性を認識したのである。



『Wisdom & Mercy』No. 4



寛が学んだ哲学館狭舎(小石川時代)

井上 円了(いのうえ えんりょう、安政5年2月4日 - 大正5年3月8日)は、仏教哲学者、教育家。  
 多様な視点を育てる学問としての哲学に着目し、後に東洋大学となる哲学館を設立した。また、迷信を打破する立場から妖怪を研究し『妖怪学講義』などを著した。「お化け博士」、「妖怪博士」とも呼ばれた。

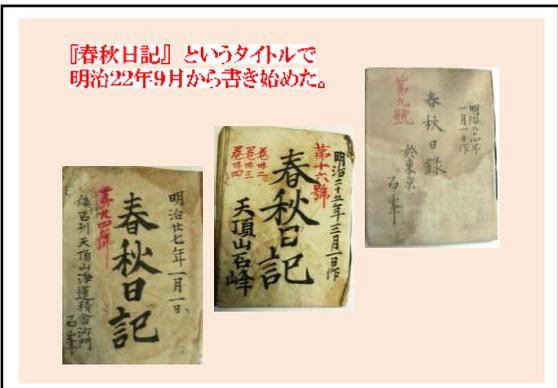


哲学館主・井上円了

使用日記(上京中の日記)  
 婚約時代(スケッチと歌)  
 購読雑誌類と蔵行携行品  
 二人の写真(寛・静子)  
 蔵書目録・系図・世代記  
 天頂山ニュービルディングと境内図  
 中世史の編纂  
 旅立ちの時(M31.10.4)  
 東京・送別会の写真(M31.11)  
 神戸港から出航(M31.11.12)  
 ダライラマ13世あて親書



哲学館卒業写真M26.7.7



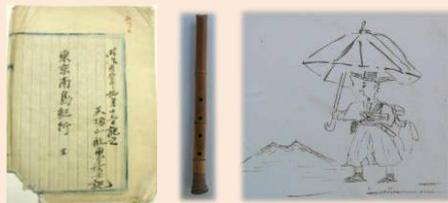
『春秋日記』というタイトルで  
 明治22年9月から書き始めた。

最愛の妹を無くした、心の葛藤との戦いの様  
 を半年後に次のように詠んでいる。

やがて死ぬ 景色は見えぬ 蝉の声  
 無き人の 小袖を 今や 土用ぼし  
 夏瘦と 人に 答えて 涙かな  
 ふけてまてども 来ぬ人のおどづるものは 年ばかり  
 数ふるゆびの ねつなきつわしや てらされて 居るはいな



廣應義塾、哲学館在学中に「東北紀行」(23年7月)、「富士山単身登山」(24年7月)、「伊豆七島めぐり」(25年8月)などチベット行きを想定しながらの訓練と体験を積んだ。



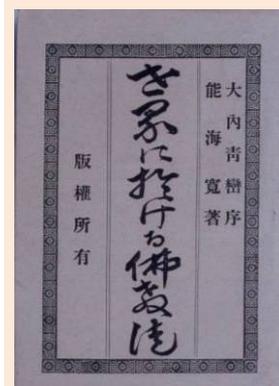
自画像スケッチ

聖地の巡礼の必要を述べ、白らは、伝教大師の高徳を慕い比叡山に参詣し、口蓮上人の遺徳を慕い身延山に登り、板敷山を越え親鸞聖人の旧蹟、貞宗の開の地である稲山の草庵に詣で高僧の遺徳を得るなど正に聖地巡礼を実地追想済みである。

7月には、「東北紀行」を行い、親鸞聖人が浄土真宗を開いた、常陸国稲田郷を訪れた。この時は、筑波山にも登山して、山頂の小体宮で「筑波山社図」の木版刷りを入手している。



能海寛の著書





高楠順次郎掃帚記念 M30.2.6 上野公園 韻松亭

婚約時代／東京

不忍ヶ池、井の頭公園でデート中のスケッチを書き残している。

尺八は、師範の資格をもっていた。

学生時代、夏期旅行に尺八を絶えず携帯した。



能海壽子 (M31年6月)

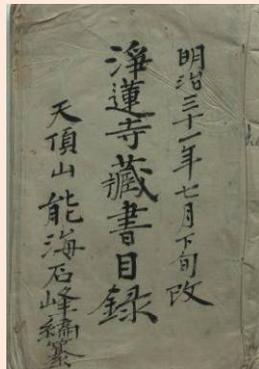
天頂山浄蓮寺と能海寛手植えのハクモクレン



2,000余冊の蔵書を僅か13日間で纏めた。



図書室が壁で書き上げて、出てくるといふので、その間から蔵書に手を廻らせた。それ以上に蔵書の整理は出来た。1919年、全日本書局が設立されたのである。



チベット探検出発一週間前の送別会記念写真(東京・宝亭)

明治31年11月11日、本山へ行き服、ダライラマ13世への親書、東上費住復10円78銭、並びに西蔵探検費1千円の内3分1、370円を受領した。

※1,000円(現在の25,000,000円)

翌12日、11時に神戸港から西京丸で出航した。門司港、長崎港を経て上海港に着く。17日、上海領事館に行く。



京都普通教校と文学寮時代のこと

「The Literature」(文学)を発信した年月は分らないが、21年9月までは、この「The Literature」というタイトルで、英文集が発行されていたものと考えられる。

21年10月からは、『New Buddhist』というタイトルで、週刊誌を発行して、「新仏教徒」運動を活発化させた。

23年に、東京へ移ってからは、『Wisdom and Mercy』というタイトルに変更し、月刊誌とした。

これらの推移を見るに、寛の発想力と着眼点、そして、友人を吸引し、束ねる能力の卓越していることに感心するものである。

### ③「不惜身命」の生き方に学ぶ (海外編)

神戸港から上海へ

中国大陸巡礼旅行地図

『渡清日記』

中国の電報

旅行許可証

護照

傳牌

『渡清日記』・『春秋日記』

『官話記一号』

三峡のスケッチ

峨眉山巡礼

『飛越関碑記』

『西藏大蔵経典』

折多峠～白ユ大

最後の写真(2枚・M32)

四川の草鞋(2足)

四川・糧台贈の扇子

書簡

写真(五体投地・服装・マニ輪・チベ

ット犬・テント・ヤク牛・ラマ僧・

ダルツェンド古寺院・鳥葬)

大聖慈寺証録

書簡

ラサ・テンゲーリン寺のスケッチ

チベット地図

拓本(武侯祠堂碑・普賢金殿記碑・

永明華蔵寺新建銅殿記碑)

寺本婉雅と成田安輝

チベット経文

『第1号』 日々一行日記

『第6号』 西藏国地誌略

『第8号』 瀘定橋

『第3号』 裏塘・巴塘

『在渝日記』(重慶)

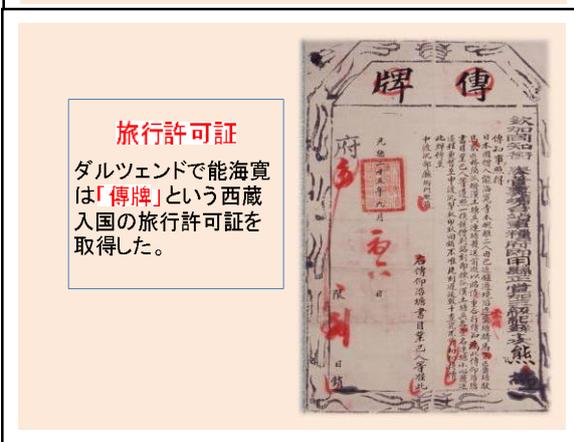
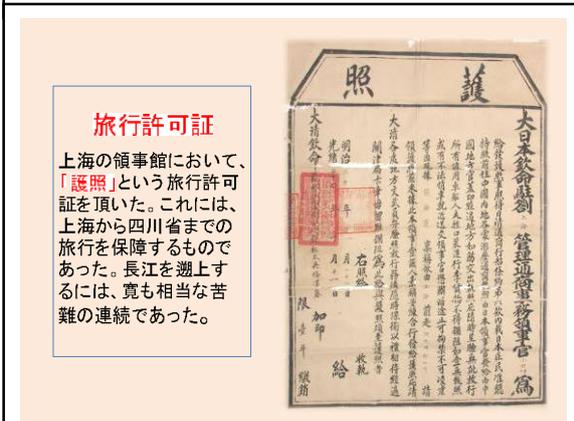
『丙第5号』 西藏国仏像集

民俗の記述(ラマおどり)

滅十罪経典

カンリン(人骨笛)

仏像・仏具・小仏像



書簡

タルチョー

請来品

牛古渡・金沙江

ダルツェンド市街図

仏像スケッチ

丙第拾号 金剛経の翻訳

ボン教の翻訳

第二次探検準備品・探検コース

探検行程図

農産物の種子

青海省地図

盗難に遭遇

甘肅論の下書き

第三次探検(雲南コース)

『黙南識略』

『天下路程』

『金沙江源流考』

『西轡日記』

『莫包脚歌』

『続黙書』

『新疆賦』

『雲南地誌』

行方不明1か月前に求めた書籍『黙南識略』

不惜身命の境地

哲学館より「講師」の称号(M36)

留守家族の写真

横死情報届く・岡田利喜太

横死訃伝の報・井戸川辰三

北京順天時報・松島宗衛

反省会雑誌・桜井義肇

追悼法会・浅草本願寺(M38.7.26)

井上円了の弔辞

西藏經典目録(南條文雄⇒能海静子)

南條博士が河口慧海二次探検時に探索依頼

南條博士の掛軸4幅

能海寛歴史資料が浜田市指定文化財に

浄蓮寺境内図

写真(顕彰碑・歌碑・顕彰板・資料館・

印鑑・指定書・仏像・能海資料の展示模様)

般若心経直訳

チベット語經典

三峽のスケッチ



三峽(瞿塘峽(ふとうきょう)・巫峽(ふきょう)・西陵峽(せいりょうきょう)のスケッチ62点

峨眉山へ巡礼登頂

寛の西藏探検行は、目的は一つ、のみではなかった。仏教聖地の巡礼であった。峨眉山登山が正に、**聖地巡礼**と言えよう。『世界に於ける佛教徒』第13章巡礼、では「宗教上において、教祖の遺徳を追慕し、その霊場を巡拝すること……。」が、巡礼だと述べている。



中国での記念写真



四川省の草鞋



經典や圖をダルツェンドから重慶までの運賃が六兩要したことや音簡などの発送データも完全に記載している。

思想の変遷

本山上申 (24 通)

蔵書写真

出版本

『能海寛遺稿』

印鑑

能海寛研究会の事業

年次大会

定例学習会

日中合同世界会議 (中国・銀川市)

東京大会 (日本プレスセンター)

別府定例会 (別府市・大谷記念館)

紀伊田辺定例会 (南方熊楠顕彰館)

知的国際交流

能海寛著作集 (全 15 巻・18 冊)

能海寛の意志を受け継ぐ波佐文化協会

波佐成人学級の開講

リーダー養成講座「波佐寺小屋セミナー」

ふるさとカルチャー「なわて塾」

能海寛のふるさと100Km ウルトラマラソン

能海寛歌碑巡りウォーク大会

能海寛の生き方に学ぶ



チベット巡礼探検家

求道の師

のうみ ゆたか  
能海 寛

明治の三蔵法師と称される能海寛は、禁断の国チベットの「西藏語大蔵経」を入手して、世界共通語の英語による英訳仏典を世に出し、5億人と目される仏教徒を纏めて世界宗教会議所を設置、仏教大学を設置したいと壮大な計画を胸に描いて、中国大陸へ渡り、上海から長江を遡上して、三峡、重慶、裏塘、巴塘、成都、西安、蘭州、青海、貴州、雲南、麗江、中甸と1万2千Kmを越える距離を踏破してチベットへ向かった。明治34年4月18日付南條文雄博士宛書簡を最後に雲南の奥地で消息不明となり不帰の人となった。

聖地ラサまでは辿り着けなかったが、邦人として、最も早く西藏領へ2回(四川省巴塘・青海省タンガル)も初入国した。幸いにも、巡礼旅行中の紀行記録・探検記録・仏典翻訳・日記・出納記録など(『能海寛著作集』全15巻に収載)が沢山残っているので、今後、西域研究をする上で重要な文献となり得る。

チベット巡礼探検家・仏教哲学者。明治元年5月18日、浜田市金城町長田浄蓮寺に生れる。京都普通教校、大学林文学寮、慶応義塾を経て、哲学館(現在の東洋大学)を明治26年7月に卒業。京都普通教校在学中の明治21年10月よりE・C・S(English Composing Society「英文会」)を立ち上げ仏教を英文により週刊機関誌『NEW BUDDHIST(「新仏教徒」)』を発行し、新仏教徒運動を起す。慶応義塾では、月刊機関誌『Wisddom & Mercy(「智恵と慈悲」)』を発行する。更に『経緯会』へと発展し、明治31年に境野哲海へ引き継がれ『新仏教徒』運動が大きく伸展していった。

著書『世界に於ける佛教徒』。翻訳「般若心経(梵・蔵・漢・英対訳)」、「西藏ボン教」ほか多数ある。

なお、能海寛資料(3,000点)の内、「能海寛関係歴史資料(357点)」が浜田市文化財指定となっている。



能海寛の故郷・天頂山浄蓮寺



ポーター游頓甫氏と(M32)



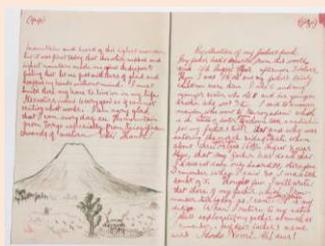
能海寛の将来品の一部



傳牌(旅行許可証)



哲学館卒業記念(M26.7.7)



『Wisddom and Mercy』



英文機関誌『智恵と慈悲』、  
と英文日記『春秋日記』



テンゲー・リン寺のスケッチ



「滅十罪経」(西藏語大蔵経)



カンリン(骨笛)



チャンバラ神(西藏仏像)

## ふるさとカルチャー「なわて塾」(第4次)

(第10回)「波佐の風致から学び発信しよう」—波佐をガイドする人づくり—

日時 3月20日(日) 19:00-21:00 会場 ときわ会館



- 【自然】 ● 国定公園大佐山・大潰山でハイキング・自然観察
- 周布川で「水生昆虫観察」・アユ・ヤマメ・ウナギ釣り
- みんなで守る郷土の自然「常磐のカシ林」と遊歩道で自然観察
- 県・市指定天然記念物の「巨樹・巨木群めぐり」
- 【歴史】 ● 「笠松峠の畳石路」ハイキングコース
- 「千年比丘一号墳」と経塚めぐり
- 波佐一本松城・花城の「城郭めぐり」で中世の山岳城郭を学ぶ
- 黒金(たたら製鉄)の研究ネットワークを地域研究センターで
- 【文化】 ● 浜田市金城民俗資料館で民俗学・民具学を学ぶ
- 浜田市金城歴史民俗資料館で考古学・冶金学を学ぶ
- 能海寛研究会で「チベットセミナー」聴講
- 文化講演会で「文化財学習」
- 【景観】 ● 傍示峠からの「波佐・長田地域の遠望」
- 大井谷の「棚田風景」
- 周布川と「波佐のピラミッド(花城)」の風景
- 猿瀧の「沢登り」
- 【まつり】 ● ほたる祭りとはたる回廊
- 秋祭りと夜神楽
- 能海寛歌碑めぐりウォーク
- 島村抱月文学散歩コース

### 学べる博物館リレー講座

- ① 笠松峠の畳石路
- ② 波佐一本松城
- ③ たたら製鉄関連遺跡
- ④ 巨樹・巨木・名木
- ⑤ 地域まるごとミュージアム

① 笠松峠の疊石路

亀岩／立石（記念碑）／大芝／涼みの松／水の横側（地蔵堂）／笠松鉄穴流し跡／全長 1800m

② 常磐山八幡宮

みんなで守る郷土の自然地域「常磐のカシ林」／県指定天然記念物「常磐の大杉」5 株／奉納絵馬額 16 面／能海寛詠歌碑 2 基／八卦占い／手水鉢

③ 能海寛のふるさと

能海寛顕彰碑／歌碑／略歴碑／浜田市指定天然記念物「ハクモクレン」／天頂山浄蓮寺／鐘楼門／薬師山の歌碑／本堂の狭間

④ 普明山永昌寺

尼子経久公の墓／浜田市指定天然記念物「大杉」1 株

⑤ 波佐一本松城

浜田市指定史跡／豎畝型阻塞／礫石置き場／水撥ね施設／主郭／L 型武者走り

⑥ 浜田市金城資料館

浜田市民俗資料館

波佐の山村生産用具 758 点（国指定）／波佐の山村生活用具 221 点（県指定）／緒職用具など総点数 3,500 点収蔵

浜田市歴史民俗資料館

能海寛歴史資料 357 点（市指定）など 3,000 点／

鉄穴流し用具／たたら製鉄用具／鍛冶屋用具／たたら関係古文書／たたら絵図 35 点（市指定）／など 6,600 点／埋蔵文化財 3,000 点（「金田 1 号墳出土品」市指定）／（「千年比丘 1 号墳出土品」市指定）

⑦ 郷土の傑人顕彰板

郷土の偉人チベット探検家・能海寛と日本近代劇の創始者・島村抱月の顕彰板（略歴碑）で、昭和 51 年 11 月 28 日に波佐文化協会の発起により町民の浄財(378 名)で完成した。抱月の生誕地を調査・研究して、確定した事によって、この顕彰板が建立された。

⑧ たたら製鉄関連遺跡

鍋滝鉦／金屋子神社／カツラの樹（市指定天然記念物）／泊小屋鉦／栃下鉦／桂迫鉦／田野原鉦／二子山鉄穴／大潰鉄穴／

⑨ 大人・小人伝説

波佐には、古くから大人(おおひと)・小人(こひと)伝説が伝わっている。大人弥五郎伝説は、九州南部の宮崎・鹿児島地方に伝わっている伝説であり、全国的には、ダイダラボッチと称する巨人伝説もありいずれも「おおひと」と呼ばれている。

これらの大人・小人伝説は、古代のたたら製鉄に関連する伝承であると考えられる。先ず、大人伝説とは、たたら集団を指し。小人伝説とは、鍛冶屋集団を指すものと考えられる。

足跡の大きさは、長さ 37.5 cm、横巾 15 cm ほどの大きさである。

⑩ 巨樹・巨木・名木めぐり

常磐の大杉 5 株（県指定）／普明山の大杉（市指定）／ハクモクレン（市指定）／長田のエノキ（市指定）／千谷のモミジ（市指定）／若生のケヤキ巨樹群（市指定）／鍋滝の大カツラ（市指定）／若生のモミジ（市指定）／不豆喰のヤブツバキとケヤキ巨樹（市指定）／光超寺の大イチョウ（市指定）

⑪ 速田神社と亀谷家

安芸の国、速谷神社の御神体を祀る神社

⑫ 島村抱月生誕地顕彰の杜

島村抱月胸像／略歴碑／歌碑／生誕地顕彰碑／メロディ・ボックス／

⑬ 花城（姫ノ城・中谷城）

城郭／白子姫の墓／六角堂／姫隠し岩／能海寛詠歌碑 1基

⑭ 千年比丘一号墳

この千年比丘1号墳は、直径15mの円墳で石見地方最古の古墳である。埋葬施設は東西に川の字型に3つの埋葬施設がある。墳丘上には頭大の砥石が置かれていた。周辺には鼓型器台などが壊されバラ撒いた儀式的様相を呈している。周辺には縄文・弥生・古墳時代の集落遺跡があり、七渡瀬Ⅱ遺跡の住居址はセットである。古代のたたら製鉄を研究する上で重要な遺跡である。

⑮ ふるさと学習

小学校課外学習／民具と昔の暮らし／金城町の偉人／たたら製鉄と暮らし

⑯ カルチャー講演会

チベット巡礼探検家 能海寛／文豪 島村抱月／黒金（たたら製鉄）と流通／地下農民の生活史／古代・中世の遺跡と山城／石見地方の紙漉き習俗

⑰ 民俗資料回想セラピー

認知症の予防・抑制プログラム／①民具に触れよう ②半世紀前の生活習俗を観る ③プレイバック・ディスカッション

⑱ 民俗資料を通して認知症の予防や抑制

浜田市金城民俗資料館では、「民俗資料回想セラピー」として、高齢者を対象に収蔵している民俗史料を活用した回想セラピーが出来る資料館運営を行っています。

かつて自分たちが使用していた民具に手を触れながら楽しいおしゃべりや民具を用いた労働慣行の写真映像を観て認知症予防を中心に予防や進行抑制に支援出来る資料館を目指しています。

⑲ カルチャーミュージアム(学べる博物館)

ただ観るだけの観光に終わらず、多機能に亘る学習ができる「地域まるごと博物館」であることを基本としてプレゼンテーションしたい。

⑳ 文化講演会

毎年、3月開催の文化講演会は、西中国山地民具を守る会主催で46回開催。

毎年、7月開催の文化講演会は、能海寛研究会主催で26回開催。

既に存在している地域の資源を活用して、地域全体を博物館と見立てネットワークする。自然・歴史・文化・景観・まつりを包括する地域資源を活かし地域活性化を図り、エコ・ツーリズムの推進で都市交流・滞在型の観光・体験学習ができるカルチャー・ミュージアム（学べる博物館）を目指す。

